

「小特集 サッカー・アジアカップ」に関する反応——その2

『中国研究月報』編集委員会

アジアカップ問題は どう語られたのか

(東京大学大学院) 家永 真幸

アジアカップの騒動後、多くの雑誌で関連記事や特集が掲載された。本誌でも2004年9月号で小特集「サッカー・アジアカップ」が生まれ、先月10月号には、それに対する反応として新たに二編の文章が掲載されている。本稿は、そのようなアジアカップ騒動に関する記事のうち、月刊総合誌に掲載されたものを中心にいくつかを紹介しつつ、本誌で議論された内容も加味し、今回の騒動から論壇がどのような問題を抽出し、議論の対象としたのかを整理してみたい。インターネット上でも活発な議論が行われている状況下において、雑誌の記事に限って、しかもその一部で行われた議論のみを取り上げることがどれだけ意味を持つのかは疑わしいところではあるが、読者の方々の何らかのお役に立てれば幸いである。

なお、アジアカップ前後の日中関係にまつわる議論の整理としては、読売新聞に掲載された「[論壇2004] 8月——中国ナショナリズムの構図 国民再統合の手段」(読売新聞2004年8月30日夕刊)や「[論壇2004] 9月——日中関係『反日』を超えるには」(読売新聞2004年9月29日夕刊)なども既に存在するが、本稿は以下で5つの小見出しにしたような観点から、改めてまとめなおしたものである。

I. アジアカップ騒動は「異常」だったのか

アジアカップ騒動を扱う記事の大半が、今回の騒動を「異常」な事態であると認識している中、宇都宮徹也「中国が学ぶべきホスト国の矜持」

(『中央公論』2004年10月号)は、サッカーの国際試合における国歌へのブーイングはきわめて日常的な行為であり、アメリカやドイツもその標的となるが、国家元首が「遺憾の意」を表明することはないと指摘する。アジアカップ騒動をめぐる議論において「サッカーの特殊性」についての議論が欠けているということは、園田茂人「対外認識の愛憎二重心理とどう向き合うか」(本誌2004年9月号)によって既に指摘されている。「サッカーの特殊性」に着目した数少ない例である宇都宮氏の議論からは、「サッカーの文脈」のみに即して考えた場合、今回の騒動は必ずしも「異常」とは言いきれないことがうかがわれる。

II. 問題の所在は

では、アジアカップ騒動の一体何が問題なのであろうか。宇都宮氏は、中国のホスト国としての態度こそが問題の本質であると結論する。宇都宮氏に限らず、渡邊昭夫「国家は敵でも人民は友、というのは本当か?」(『中央公論』2004年10月号)をはじめ多くの論者は、「国際社会での中国の評判が傷ついた」「中国はオリンピック主催国として相応しくない」といった感想を抱いている。石原慎太郎・中西輝政「暴発する中国ナショナリズムを封じ込め!」(『諸君!』2004年10月号)は、「中国の本性の低さを改めて実感した」(石原氏)とまで言い切る。このような議論に対し、並木頼寿「サッカーと歴史認識」(本誌2004年9月号)は、「『近代化』に先んじた日本が、中国の『近代化』の遅れを指摘し、問題にする、これこそ近百年数十年来、日本と中国の歴史的な関係の、ひとつの典型的な現れにほかならない」と注意を喚起する。

このような、中国のホスト国としての「資格」に関する議論以上に、各誌記事の主流となっているのは、日本選手へのブーイングや、日本人観戦客への危害、「日の丸」「君が代」に対する冒瀆といった、「反日」的行為を「問題」とする議論である。これは論壇に限られたことではなく、実際に試合を戦った当事者である日本代表の田中誠選手も『週刊サッカーマガジン』2004年8月24日号のインタビューに対し、「『君が代』が流れてる間のブーイングは、許せないことでしたね」と答えており、「反日」を問題視していたことが分かる。今回の騒動が、少なくとも表向きは過激な「反日」運動として起こっている以上、これは当然のことであろう。

「反日」騒動の起こる原因としては、ほとんどの論者が共産党政権下での愛国主義教育を挙げている。たとえば、井沢元彦「中国共産党にとって日本は常に悪役でいなければならない」(『SAPIO』2004年8月25日・9月8日号)は、中国の「反日」は日本にとって「『身から出たサビ』といえる部分もないわけではない」と譲歩しながらも、「過去を絶対忘れるな」という教育が、ことごとく尖閣諸島などの現代の問題と結ぶつけられることを問題視する。また、江沢民政権下における「反日」教育の強化を特に問題とする論者も多い。

このような議論に対し、趙宏偉「日中友好運動の終焉と国家間相克関係の顕在化」(本誌2004年9月号)は、日中の「反日教育」と「反中教育」をめぐる論争は1910年代には既に始まっており、必ずしも新しい問題ではないことを指摘する。趙氏は、今回の騒動は日中関係が「特殊関係意識の消失から政治関係と民間感情の悪化へ」という構図の中で起こったと分析する。論調は異なるが、趙氏と同様に日中の歴史の長いスパンの中に原因を探ろうとするものとして、古田博司「蔑日は伝統、反日は国是」(『諸君!』2004年10月号)がある。古田氏は、中国に限らず朝鮮半島も含めて、

「反日」の原因は「中華思想」にあると考え、「中世の歴史は日本侮蔑の中華思想の歴史であり、近代国家の歴史は、その日本への抵抗から始まったものである。日本侮蔑は伝統であり、反日は修正不可能な、いわば国是なのである」と指摘する。

またこれらの他に、清水美和「中国『反日』民意の底流」(『世界』2004年10月号)や週刊誌記者匿名座談会「中国人の対日感情——サッカーとエネルギー——」(『自由』2004年10月号)などの記事は、尖閣諸島問題を例にとり、「反日」と中国のエネルギー問題の関連性にも言及する。清水氏は、2004年3月に尖閣諸島への強行上陸を行ったことでも知られる「中国民間保釣連合会」が公安当局の干渉を受けていないことなどから、党・政府内部にこのような団体を支持する勢力があると推測している。ただし、水谷尚子「中国『反日』運動家“紳士”録」(『諸君!』2004年12月号)が中国の反日活動家10人に対して行ったインタビューによると、反日団体と中国政府当局は実は「大変微妙な関係」にあるという。また、アジアカップ決勝戦で中国人がスタジアムで「釣魚島を返せ」とスローガンを掲げたのは、「保釣連合会」が主導した組織的行為ではなく、民衆の自発的行為であったという。

Ⅲ.「反日」が問題の核心か

以上のように多くの記事が「反日」を問題の中心として扱う一方で、騒動のさなかに中国の民衆と警察が衝突している点に着目し、アジアカップ騒動の本質は「反日」なのではないとする主張も存在する。前出の清水氏は、「権利意識や自己主張に目覚めた民衆が、日本への反発にとどまらず政府や社会的不公正にたいする不満を比較的安全に表現する手段として反日を『発見』した」が、「『反日』はデモや集会など正常なルートで表明することは難しく、西安事件やアジアカップのように何かのきっかけで、極めて非理性的な形で噴出

する」と事件の原因を分析する。富坂聰・水谷尚子「試合後、北京は『天安門事件』寸前だった」(『諸君!』2004年10月号)も同様に、騒動の本当の原因は「靖国」や「南京」ではなく、中国国内で正確な情報が伝わっていないことや、「社会階層問題」など大衆の間に鬱積した不満が政府には向けられないことにありと指摘する。青木直人「サッカー・アジア杯『反日騒動』の全真相!——断罪されなかった事件の“共犯者”たち」(青木直人編著『別冊宝島Real60号 中国利権の真相』2004年10月11日発行)も、騒動と同じ時期に起こったある二つの事件に着目し、中国の市場経済における「勝ち組」と「負け組」の分化が、騒動発生の要因となっていると指摘する。その二つの事件とは、天安門広場において農民による2万人規模のデモが計画されていたのを公安当局が事前に封じ込めた事件と、北京市共産党委員会の書記がオリンピック道路の建設に絡む贈収賄で逮捕された事件である。アジアカップ騒動以降も重慶や広州において暴動が起きたと報道されていることを考えると、これらの見解の説得力は高いといえよう。

また、清水美和「『抗日教育の老師』江沢民最後の逆襲」(『諸君!』2004年10月号)は、政権上層部の暗闘をアジアカップ騒動の最も奥深い問題と考える。「北京で民衆の集団行動を治安部隊が阻止できなかったのは天安門事件以来で、胡政権の威信は大きく傷つけられたことになった」と清水氏は分析する。しかし、アジアカップ騒動はむしろ、大衆に不満を鬱積させ、過度な愛国主義教育を行った前政権＝江沢民政権への批判につながりうるとも考えられないだろうか。アジアカップ騒動から約1カ月後には江沢民の引退が決定されたが、この間、胡錦濤派と江沢民派の間で激しい暗闘が行われていたであろうことが、小島朋之「江沢民は中央軍委主席を辞任」(『東亜』2004年10月号)や濱本良一「江沢民と胡錦濤、暗闘の記

録」(『中央公論』2004年11月号)などによって指摘されている。ただし、この引退劇とアジアカップ騒動との関連性の有無は、いまだに明らかにされていない。

IV. 教訓は何か

前出の『サッカーマガジン』は、「大会きっての憎まれ役として、常に敗戦を期待されていた」中で日本が勝利を収めたことに、惜しめない賞賛を送る。このように、逆境に耐え、はねのけることの大切さを今回のアジアカップから学んだとする議論が各誌で散見される。前出の宇都宮氏は、「六万人の猛烈なブーイングをものともせず、見事アジアカップを勝ち取った、我らが日本代表のように」毅然とした態度で中国の現実と対峙すべきである、という教訓を導き出している。さらに、前出の中西氏は、決勝戦で3点目を入れた玉田選手を引き合いに、「つねにすぐれた技術力と『やってやるぞ』という気概をもっていれば、日本人一人あたりで四十人位の中国人を相手にできるのです」とまで言明する。

ここで興味深いのは、中国側も自分たちは逆境に置かれていたと考えている向きがある点である。袁鋼明「されどサッカー：北京球迷のみたアジアカップ」(本誌2004年9月号)は、一見純粋にサッカーを愛好する立場から冷静に中国の敗因分析を行っているように見える。しかし、袁氏は「誤審という不利な状況を挽回できなかったのは、ひとえに攻撃力の不足による。経験を積んだ今日の中国チームは、誤審や作為に慣れ、ピッチの上は合法的な権謀術数の場であることを学んでいなければならない」と結んでおり、結局は「誤審に屈した」という被害者意識は前提とされている。そのような逆境に対しても毅然とした態度で臨まなくてはならない、という教訓を抽出するのは、まさに宇都宮氏らと同じ論理展開である。この両者の対比から、今回の騒動に関して、日中双方が

それぞれ被害者意識を持っているのではないかということが見て取れる。このような双方の態度が日中間の議論をかみ合わなくさせている要因のひとつであると考えすることはできないだろうか。

V. 日本は国民統合不足なのか

最後に、ほとんどの記事は共通して、中国に対する「怒り」や、望ましくない事態が起こってしまったことに対する「憂い」といったマイナスの感情を前提として書かれていることを指摘したい。

前出の田久保氏は、アジアカップに関する日本国内での報道について、「おかしな解説はありますが、各社とも『中国の反日は尋常ではない』というトーンで報じていた。これは、いままでになかったことではないでしょうか」と肯定的に評価している。これと似た事例として、前出の富坂氏は、「国内では絶対『君が代』は歌わないと豪語する北京在住のサヨクの友人が、『初めて朗々と『国歌』を歌ってしまった』と苦笑していました」というエピソードを紹介している。ここから見て取れるのは、中国における愛国的反日行為が、却ってこちら側に、「私たちは『日本国民』である」と強く意識させる効果を及ぼしたということである。前出の小堀氏は、さらに議論を発展させ、天皇による靖国親拝を復活させることにより、日本国民は団結して中国に対抗すべきであると主張する。

このような議論に対し、前出の古田氏は、「最近の中国・韓国・北朝鮮の行動はあまりに見苦しい」と嫌悪感を示しつつも、北朝鮮が「カルト国家」化する過程で「イデオロギー的触媒となったのは日本から彼らが持ち込んだ戦時中の国体思想であった。我々の既視感を呼び起こす北のテレビ映像の起源は、われわれ自身の歴史でもあるのである」とも指摘している。古田氏の結論は、日本は「アジア主義を棄てるべきである」というものではあるが、国民統合を強化することで相手側の

国民統合の排他性に対抗しようというのも必ずしも正しい対処法ではないと示唆しているようにも読める。

さらに、代田智明「ぼくたちは好戦的!?!」(本誌2004年9月号)に至っては、スポーツの国別対抗戦における「国旗」掲揚と「国歌」吹奏、ひいては国民国家建設そのものに否定的である。代田氏は、アジアカップの「日の丸」「君が代」に対するブーイングについて、『『君が代』のために迷惑を被っている人を思えば、私としては、このブーイングに限りない快哉を叫びたい。世界のどこでもよい、あの旗とあの歌に快くブーイングを叫べる場所があることは、動機がなんであれ、喜ばしいことではないのか』と謳い上げる。このような主張は、多くの記事の中にあって極めて異色である。ただし、この代田氏の文章に対し、三好章「アジアカップと『国民国家』……『理解に苦しむ』代田氏へ」(本誌2004年10月号)は、「代田氏が呼びかけようとしている中国の『同志』たちは、代田氏の願うように虚像かつ虚妄なる国民国家を粉碎しようとしていた」のではなく、「ショーヴィニズムに片足を浸して、自らの国民国家を礼賛しようとしていた」のではないかと疑問を呈する。また、梶谷懐「『反日』をめぐる言説とジェンダー——本誌9月号小特集に寄せて——」(本誌2004年10月号)は、小嶋華津子「8月7日北京工人体育場外にて」(本誌2004年9月号)や酒枝響子(水谷尚子)「『日本鬼子の脳天に太刀を振り下ろそう』の大合唱がこだました」(『SAPIO』2004年8月25日・9月8日号)を例にとり、「身の危険も省みず現場における多様な声に耳を傾け」る女性たちに対し、代田氏は「『他者』への視点を欠いた傲慢で男性中心的な姿勢」とであると批判する。これらは、概ね妥当な批判であると思われる。しかし、代田氏の議論が、論壇がアジアカップ騒動を「不快なもの」として扱うことにあまりに無批判であることを浮き彫りにした点は、やはり有

益な問題提起であったと考える。

その点では、小倉和夫・小島朋之「日中の“パートナーシップ”を築け」(『潮』2004年10月号)も注目に値する。この対談はアジアカップ騒動の話題からスタートしているにもかかわらず、騒動に対する論者の感情がほとんど表れていない。日中関係全般に関する対談であり、アジアカップ騒動を専門に論じたものではないにせよ、この騒動をことさらに重大視しない態度は、他の記事と並べてみると、却って不自然に感じられるほどである。

まとめ

アジアカップ騒動から4カ月近くが経過し、上で紹介してきたような活発な議論が行われてきたのであるが、一般の読者はこれらからどのようなことを読み取ることができるだろうか。ひとつには、「中国では貧富の差などの国内問題を主要原因とする暴動が起こりうる状況にあり、それは『反日』という形をとる可能性がある」ということが、おそらく客観的な事実として受けとめられるであろう。その結果、たとえば「中国に行くと恐ろしい目にあうかもしれない」と考える人が増えたとしても、それは「愛国主義」や「中国嫌い」以前の問題であり、自然な想像であると言わざるを得ない。そう考えると、「日本は北京オリンピック出場を辞退すべし」といった議論もひとつの極論として読者を獲得しうるのではないかとも思

えるのだが、小林よしのり「新・ゴーマニズム宣言」(『SAPIO』2004年8月25日・9月8日号)が欄外でわずかに主張している程度で、あまり見かけない。やはり、前出の小倉・小島両氏の対談はやや極端にしても、論壇全体として、アジアカップ騒動自体は日中関係を大きく揺るがすほどの問題とまでは考えられていないようである。ただし、この騒動を生み出す背景となった諸問題については、これからも慎重に考えていかななくてはならないであろう。

筆者自身はこれまで、特に愛国心が強いわけでもなく、中国に対しては比較的友好的な感情を持ち、かつサッカー日本代表チームにそれほど強い思い入れはなかった。にもかかわらず、アジアカップ決勝戦をテレビで見た際、思わず心から日本チームの勝利を祈り、その勝利に安堵してしまった。Vの富坂氏のエピソードにもあるように、筆者のような「にわかサポーター」は意外と多く存在するのではないかと思われる。なぜこのような感情が湧き起こるのかを、上手く説明してくれる議論は今のところ見当たらない。しかし、各誌の議論を参考にする限り、必ずしも「国の名誉が傷つけられた」とか「同胞が危険にさらされた」という感情だけが原因ではなく、「中国はこうあるべきだ」「サッカーの試合はこうあるべきだ」といった期待が裏切られたことに対する不快感が強かったのではないかと、現在のところ考えている。

年末年始休館のお知らせ

誠に勝手ながら以下の日程で、事務局・図書館をお休みさせていただきます。

- 事務局 2004年12月28日(火)～2005年1月5日(水)
- 図書館 2004年12月25日(土)～2005年1月6日(木)

※2004年は12月24日(金) 17:00まで、2005年は1月7日(金) 10:00からとなります。尚、電話、FAX、メールによるレファレンスは1月6日(木)より受け付けいたします。

皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします。

2004年も大変お世話になりました。2005年もよろしくお願い申し上げます。

社団法人中国研究所